事例No.	3201
公表年度	R6
団体の属性	一般市
団体名	新潟県十日町市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・移住定住 ・人材確保・育成

事例種類	人材確保・育成

事例内容・タイトル

ミッション型地域おこし協力隊×里山プロジェクト

出典

地域づくり人材の養成に関する調査研究会（令和6年度第３回報告書）

事例５　新潟県十日町市（ミッション型地域おこし協力隊×里山プロジェクト）　その１

団体	新潟県十日町市
外部人材	星裕方氏（十日町市地域おこし協力隊）　※外部人材：自治体（地域）外から地域づくりに携わる人材
外部人材活用の分類	□①活動局面を限定（例：研修講師等）　□②継続的な関わりを持ちながら活用（関係人口化）　■③内部人材化（移住・定住）し、活用
活動範囲	□所在市区町村内全域　□所在市区町村内一部地域　□複数市区町村　■その他　【主に松代地域の棚田群（儀明・蒲生・星峠の棚田】
活動の頻度、期間	週5日、令和５年４月～８年3月（３年間）
人材支援制度の活用	■有　□無　【ミッション型地域おこし協力隊】
キーワード	＃地域おこし協力隊　＃ミッション型　＃棚田再生　＃観光・交流　＃関係人口拡大　＃体験型観光　＃里山　＃魅力発信　＃通い農　＃復田 ＃クラウドファンディング　＃棚田ステーション　＃自治体間交流　＃里山プロジェクト　＃自治体間交流　＃陸の孤島

◎概要

週末、首都圏から新潟県十日町市に通うたびに棚田の魅力に惹かれた星裕方氏。東京のPR会社を退職してミッション型地域おこし協力隊に応募。着任に先んじて、すでに３年後の任期終了を見越して自身の会社を十日町市松代地域に起業。自身が経験した首都圏からの「通い農」、そこに企業研修を組み合わせて自走を目指すのが星氏の構想である。その拠点となる「棚田ステーション」建設の資金調達は、わずかな期間でクラウドファンディングでの調達に成功。都市住民による「通い農」への強い関心や反響の大きさなど順調な滑り出しでプロジェクトは進行中。

■活動開始に至る経緯

○令和３年度、十日町市は旧松代青少年研修センター「松和荘」を改修し、都市交流の拠点「松代棚田ハウス」が誕生。そこを拠点に関係人口の拡大を図るため、十日町市松代地域でのミッション型地域おこし協力隊を３名任命。それぞれ ①観光・交流による関係人口拡大、②体験型観光による関係人口拡大、③里山の魅力発信による関係人口拡大のミッションを担った。

■外部人材が活動するための取組・支援

○地域おこし協力隊は、委託事業者である一般社団法人里山プロジェクトに所属。代表の小山友誉（ともたか）氏は、15年前に協力隊に従事し、その後、定住。現在では協力隊の雇用からサポートまで全てを受託し伴走支援を行う。

○小山氏は「地域に密着する」というスタイルを15年間貫き「主語は必ず地域にある」をモットーに活動。

○現在の隊員数は22人（累計は120名程度）。定住率は累計で73.5%だが、直近５年の数字では88%の定住率を誇る。

○お試し協力隊（必須：２泊３日程度）→インターン（任意：２週間～３ヶ月）→本採用というホップ・ステップ・ジャンプの流れで採用を行う。

○小山氏いわく「起業してクラフトビールを作ったり、農家民宿を開業したり、そういう輝いて見えるところに目が行きがちだが、地域の担い手として市内企業等に就業している人もたくさんいる。協力隊として活躍している若い人たちを見て、「うちに来てくれないか」といった話もあり、そうした形で、しっかり就業をサポートしている。」

事例５　新潟県十日町市（ミッション型地域おこし協力隊×里山プロジェクト）　その２

■外部人材が本件に関わるきっかけ
○星氏は、もともと世田谷区のNPO法人neomuraに所属。そのメンバーの中に十日町市松代地域に20年以上通っている方がおり、その方から誘いを受けたのが松代地域との最初の関わり。
○初めて松代に来たときに「ここに住んでみたい」という気持ちが芽生え、そこから月１回のペースで通う生活が１年間続いた。その後「棚田を地域ぐるみで盛り上げていきたい」という思いに共感し、ミッション型の地域おこし協力隊に応募。

■星氏と他団体との関わり
○棚田学会（会員）：松代地域への移住を見据えた際、元農林水産省職員の方に誘われ、棚田に関する他地域の事例をインプットするために令和４年に加入。令和５年の全国棚田サミットin那智勝浦「棚田の守り人ミーティング」で事例発表。棚田界隈の活動を発信するきっかけづくりに繋がった。
○星峠の棚田を守る会（会員）：令和５年より会員として棚田の農道の道普請などに参画。稲刈りイベントの受け入れ、棚田を使った企業研修のビジネス実証実験を行う。
○蒲生の棚田を守る会（会長）：蒲生区長（前・蒲生の棚田を守る会会長）より会長就任の打診を受け、令和６年に着任。打診の背景には、蒲生の棚田付近で「棚田ステーション」の計画を進めていること、助成金の申請、地域外のボランティア団体の受け入れ、会員管理などの事務局業務への強みが認められたため。

■活動内容：「通い農」というコンセプトメーク
○棚田の体験活動による都市里山交流では、全国的に「棚田オーナー制度」というものが存在し、20年以上の歴史がある。しかし、体験者をいわゆる「お客様」と捉えてしまい、担い手創出に繋がらず受け入れ側だけが疲弊してしまう事例が多いことを棚田学会等で知った。そこで、外から来る方に対してより主体的に農と関わる道筋を提示するため、「通い農」というコンセプトを提案。都市に住みながら棚田耕作の主体となれるライフスタイルを提案することで、移住定住のハードルを下げつつ耕作の担い手確保を目指すための社会記号として報道でも注目され、星氏は全国的なムーブメントに発展する可能性を感じている。
○R５年は活動が初年度のため体験的なイベント企画を多く実施したが、２年目、３年目と「農の主体」となるメンバーを育成していく予定。

事例5　新潟県十日町市（ミッション型地域おこし協力隊×里山プロジェクト）　その3

■活動による成果や影響

○これまでの世田谷区と十日町市松代地域との30年以上にわたる自治体間での交流が、世田谷区の交流担当者だけでなく、世田谷区内の行政各課や区民団体ともつながりを作ってきた。世田谷区出身の外部人材がミッション型地域おこし協力隊として活動することにより、これまで以上にお互いに顔の見える交流活動の展開となった。

○世田谷区民とのより近い関係性から、都市住民が週末に地方に通う「通い農」という新たな形態を創出。越後松代棚田群の「星峠の棚田」「蒲生の棚田」「儀明の棚田」で棚田の保全活動を推進している。

○地方の高齢化、人口減少により耕作放棄された棚田を、都市住民の手で復活させる「復田」に取り組み、観光的な体験農業ではなく、都市住民が地元農家から実際に棚田を借り、共同作業で魚沼産棚田コシヒカリの収穫までの一連の農作業を、都市圏からの「通い農」でやりぬいた。

■地域の特性

○十日町市の中でも松代地域は有数の豪雪地帯。かつて冬期間は雪に閉ざされる生活が半年もの間続いた。その半面、冬期間の首都圏への出稼ぎは、外の文化を地域に持ち帰り、お互いに伝え合うスタイルとなり、今も受け継がれている。そのため、外部からの人を分け隔てなく心温かく迎える土壌が育まれてきた。

○以前は交通アクセスも悪く山間部のため、全国一律にリゾート開発が進められた際にも開発行為が行われなかった。そのため、日本の原風景が注目をされる今日では、人工物が少ない十日町市は周回遅れのトップランナーの状況でもある。

○十日町市は新潟県内唯一の国宝である火焔型土器（縄文土器）が出土した地である。現代では、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を開催しており、十日町市と津南町を合わせた東京23区の1.2倍ものエリアに約300点の芸術作品が点在する。アートを媒介した地域づくり、地域おこしにも取り組んでいる。

■今後の展望や要望など

○通い農をするには、交通費が非常に負担になっている。都市住民が地方へ移動するための交通費への補助制度のようなものがあると地方を活性化させる一つの新しいアイテムになるのではないかと星氏は期待する。